

デリダ『嘘の歴史』を読む

来るべき真理のための予備考察

大江倫子(首都大学東京)

アレントによれば嘘はつねに政治家の正当な道具とされてきた。複雑化した現代において日常的に嘘の効用を経験している私たちにとって、カントや古典期の哲学者たちの厳格な嘘の断罪はもはや素朴すぎる道徳に思われる。しかしデリダが『嘘の歴史』でまず提起する仮説は、嘘を誤謬とは区別し、他者を害する内在的志向性として定義する古典的な「率直概念」である。このような含意は、プラトン、アリストテレス、アウグスティヌス、ルソーなどに支持されている。このように定義することで、認識論や功利主義、実証主義、相対主義とは別の原理を提案し、持続的な倫理、法、政治の根拠を求めらるるのである。

導入部で提示されるこの論考の動機は少なくとも三つある。第一にタイトル『嘘の歴史』はニーチェ『偶像の黄昏』の「誤謬の歴史」を意識したものであるとデリダは述べている。ハイデガーがニーチェの最終的プラトニズム超克として参照しているこの短いアフォリズムで、ニーチェはプラトンから実証主義までの哲学の歴史を回顧し、そこに残存し続けたプラトニズムを寓話として提示する。デリダは誤謬と嘘とを区別することで、ニーチェを反駁することなくそれとは別の哲学の歴史を提起したいのである。第二に提示されるのはアレントが現代政治における嘘の増殖の特異性を糾弾する言説である。デリダは超時間的真理と連関するべき嘘が歴史をもちうるかを考察したいのである。第三に根源的なもの(聖性)より付帯的な特性(慎みや憐れみ)の超越論性を主張するライナー・シュルマンのハイデガー論を提示する。これは真理の聖性とフィクションの効用を考えさせるものである。

次にデリダは現代の政治における嘘の増殖の特異性を糾弾するアレントやコイレの論説、また過去における人道に対する犯罪の国家による認知という歴史認識の不連続的変更の出来事を参照して、自ら提起した嘘の定義を検証する。デリダはこれらの事例を分析するにあたり、嘘の概念や出来事という外在的事実的現象と、現象学的還元を経た内在的残余としての嘘の志向性を分離することで、主体の決定に意味を付与する構造、さらに証言の真実性の根拠としての聖性を前提している。結論として嘘の歴史の存在や必然性を証明できないと表明することで、デリダは当面のところこの嘘の仮説の超越論性を支持するが、その境界条件として嘘の還元不可能な歴史的次元をも指摘している。

さて歴史学者マーティン・ジェイは哲学を歴史学の導きの糸とするために、デリダの嘘の定義について数々の問いを提起している。本稿は先述の動機・定義・境界条件の解明に加えて、こうしたジェイの問いに回答を試みることで、デリダの嘘の規定が90年代からデリダが練り上げてきた根源的多様性を可能にする倫理の構造の一環として読まれるべきこと、効用と快を与える嘘の別の側面にも注目しつつ、同時にメディア技術の破格的増殖など現代と未来の新たな現象に対してつねに視点を開いていること、こうした哲学と領域科学との連携が未来の真理の到来を促すことを示す。

ジェイの数々の問いのうち、枢要なものを取り上げると以下のようなことになる。

1) デリダの嘘の定義は事実確認とは明確に区別される行為遂行的な言表として嘘を定義している。しかし祈りのような純粋な遂行的言表とは異なり嘘は事実の創出を意図していることにお

いて、この区別は曖昧さを含み解明を要する。

2) 嘘の概念の歴史、嘘の実践の歴史、嘘の誠実な語りが分離困難であると述べているが解明を要する。

3) 出発点で銘として二つの引用、すなわち嘘の歴史性の主張(アレント)と真理の聖性の主張(シュルマン)を提示しているが、解明を要する。

4) 歴史的事実について政治的見解の相違があることにおいて、嘘が真理を構成する還元不可能な歴史性があるとされているが、解明を要する。

5) 結論で嘘の歴史の存在と必然性を証明できないとされるが、解明を要する。

本稿では以上の問いに回答することで、このデリダの論考を来るべき真理のための予備考察として読解することを試みる。

1) 嘘の率直概念の強力さ

内在的意識における嘘の欲望の発生は何らかの外在的事象に触発されている。その特定の経験について事実的要因すべてを一時的に遮断し、その欲望の純粋に内在的な動機を取り出すという思考実験が可能である。嘘を実践する者と嘘が向けられた相手だけを残して世界全体を中立化すると、その嘘に他者を害する意志があるかないかが判然とわかるはずである。この他者を害する意志を嘘の条件と定義することで、事実的状况によらず明晰判明な定義が可能となるはずである。さらにこの定義は私たちの素朴な認識を問う力をもつ。政治家の主張はそれが政治的であるかぎり国民に善をなすことを意図しており、全体主義体制であろうとも嘘と定義されないのではないか。他方で友を守るためにその敵を欺く嘘をも断罪するカントの過酷すぎる定言命法を支持すべきなのか。

2) 嘘の概念、実践、志向性の区別と境界画定

内在的な嘘の志向性が産出する嘘の概念と嘘の実践は外在的であり、その時点の文化や社会の構造の影響下にあり、歴史的である。諸実践はその時代と地域の閉域において有効な形而上学概念に従って分節されることで歴史化され、諸概念は超時代的な形而上学の視点から歴史化される。たとえばハイデガー哲学では、根源的な存在の真理として贈与、正義、聖性があるとされる。他方で超越論的とされる志向性の限界として、それが純粋に内在的な自己意識の省察によって可能となる前述定的経験であることから、無意識的な記憶の沈殿の影響を免れないリスクがある。嘘の省察はこうした諸限界に開かれている必要がある。

4) 政治におけるフィクションの肯定的作用

政治としての嘘はデリダの嘘の定義から排除されるのであり、デリダはここでこうしたフィクションの真理創造的效果に存在論的に重要な意味を付与している。ハイデガーはある事象が超時間的に数々のテキストに見出されることでその真理性を示そうとしたが、デリダにおいてはかつて現前したことのない超越論的真理が見出される可能性も歴史性であるとされる。

5) 嘘の歴史の不可能性

嘘の定義を内在的な志向性とする以上、その存在は証明不可能である。それは目下のところ超歴史的と考えられるが、今後の文化社会的状況によっては変化を被ることがある。フーコーによる狂気概念や性行為の実践の歴史のように、嘘の概念や実践について閉域内での歴史を記述することは可能である。しかしデリダは閉域を超過する構造の境界画定と個別の範例の記述に留めておく所存なのである。